

車にて再び見ることのないと思っていた故郷、岩出山駅に到着、家族、親戚の人達に出迎えられました。ここで私服に着替え、白衣は衛生兵に預け、私の軍隊生活に終止符を告げたのでした。

一人でも兵隊の員数が必要な当時、兵役免除され廃人同様の身になりましたが、その後の生活にも苦労しました。すべて人手まかせなので大変でしたが、地域の皆様のご協力とそれにも増して戦地で亡くなられた戦友の今日があることを心より感謝の念でいっぱいです。

ミンダナオ島敗走記

滋賀県 堀池 栄一

私は大正八（一九一九）年五月六日生れ、昭和十二（一九三七）年三月、滋賀県立八幡商業学校を卒業して同年三月に大阪の繊維商社に入社しました。

徴兵検査は昭和十四年に受け、昭和十五年一月に輜重兵第十六連隊第三中隊（自動車隊）に現役兵として入隊しました。昭和十五年五月、陸軍自動車学校に練習隊要員として分遣され、昭和十五年十二月に上等兵に進級、昭和十六年五月に陸軍自動車学校教育期間が満了しました。

臨時編成下令、十一月、大阪港出航、十二月、奄美大島寄港、十二月二十四日、フィリピン・ルソン島に上陸、昭和十七年七月まで比島輜重兵第十六連隊にありて大東亜戦争に従事、昭和十七年八月病気のために送還された。その間、部隊名は

比島派遣垣第六五六一部隊権藤隊、第三中隊の一兵士として十二月二十四日比島ラモン湾のアテモナンに上陸、前線への輜重輸送任務に従事していた。

昭和十七年十二月二十四日現役除隊となり京都の軍需関係企業に入社しました。戦況は開戦時とは異なり日増しに厳しくなり、山本五十六連合艦隊司令長官の戦死、アツツ島の玉砕、ガダルカナルの転進等の報道がしばしばあるようになりました。

そして六月二日、会社から帰ると召集令状が届けられていました。召集令状は私にとっては初めて、覚悟はしていましたが当時の戦況は日本には不利の時でしたので一瞬こわばった気持ちになりました。

入隊日は六月七日で日時の余裕は少なく、身辺の整理を始めましたが、入隊先の和歌山県加太深山の中部第七十五部隊で、その加太は和歌山県のどこにあるか、どうして行くのか不案内で分から

なかったのです。

その夜は近くにいる親友の大久保航技中尉に挨拶に行きました。そして六月三日に会社の上司に召集令状がきたことを報告し、事務引継ぎなどを行いました。この忙しい時間の間に、親しくしていた総務課のT子に別れの挨拶をしました。六月四日、会社の壮行会にはT子は「昨夜遅くまでかって貴重品袋を縫いました」と手渡してくれましたが、それは彼女が毎日提げていたエンジ色の手提げ袋と同じ生地に、白の刺繍糸で「堀池」と名前を縫い込んでありました。袋の中には五銭と十銭硬貨が小さな布に縫いつけて入れてあり、死戦（四銭）と苦戦（九銭）を越えて無事に帰って来るようにとの願いでした。

もう一つは「後で開けて下さい」と小さい紙包みをくれました。私は彼女が与謝野晶子の歌が好きなことを知っていたので所蔵の歌集「白桜集」を別れに贈り、表門まで送ってくれた彼女の無事のお帰りを祈りますとの声を背に会社を出ま

した。

家に帰り紙包を開けると彼女の和服姿写真が一枚入っていました。その裏には短歌が一首書いてあり

「夢多き乙女の春の思出を

きみがみそばにひめておくらむ

十九の春T子」

としてありました。六月六日、出発の朝、裏の畑でいままでもらったT子の手紙を全部燃やしました。

母は三カ月ほど前より病の床に臥していましたが、これが最後の別れになるとは思いませんでした。母に「行つて来ます」と言葉をかけ、親戚や町の人々の万歳の声の見送りを受け勇躍家を後にしました。草津駅よりは大久保航技中尉が同行してくれ、大阪の難波より南海鉄道の和歌山駅で乗り換え、加太駅で下車して中部第七十五部隊の営門前で別れました。その夜は部隊近くの旅館で宿泊、明日は入隊する予定の見知らぬ数人と同部屋

となりました。これが地方で寝る最後と思うと感慨深いものがありました。

六月七日、臨時召集により中部第七十五部隊(重砲兵第五連隊)に入隊する兵舎の裏山には蟬が鳴いていました。営庭で身体検査があり、空は明るく晴れた暑い日でした。同日仮編成の独立自動車第三二三中隊に編入され、同時に入隊したのは次の四個中隊でした。

すなわち航空隊付きの自動車隊であった独立自動車第三二二中隊(橋本道男中尉)、第三二三中隊(田原秀二中尉)、第三二四中隊(市橋某中尉)、第三二五中隊(浜俊三中尉)です。

我が第三二三中隊の部隊名は威第一七六二七部隊で留守部隊は輜重兵第四連隊、中隊長田原秀二中尉でしたので田原隊と称しました。編成表によりますと中隊は中隊指揮班、第一小隊、第二小隊、第三小隊、修理班で総員百三十三人(将校四人、軍医見習士官一人、下士官二十人、兵百八人)で召集府県は滋賀県、京都府、三重県、福井県等で、

年齢は若くて二十五歳、年長者は四十数歳を越えた兵もおりました。

古くは満州事変から上海事変、支那事変等に参戦した歴戦の兵が多数を占めていましたが、自分
は上等兵で指揮班に配属になりましたが、自分
者は少なく、歩兵、騎兵、砲兵が主で、中でも騎
兵の出身者が多くなりました。戦局が激しくなっ
たためか若い兵は少なく、輜重兵科の者は数える
ほどでした。

兵舎は召集兵で満員で、自動車の車庫の中にま
で藁布団を置いて起居するほどでした。外征用の
兵器と被服等を受領し、布切れに墨で氏名を書き、
慣れぬ手つきで軍服に縫いつけました。修理班は
修理耕作用自動車を二両受領し、六月の出発の命
令を待つ間、営門で毎日簡単な訓練が行われまし
た。

兵同志はいつ出発しどこの方面に行くのかと、
思い思いに想像しての話で持ちきりでしたが、指
揮班にいた自分には第十四軍の告示を知り、十七

年除隊になるまでいた比島派遣軍が第十四軍であ
ることを知っていましたので、比島行きは間違ひ
ないと覚悟していました。

六月十八日、広島市内に宿舍設営の中隊命令を
受け、指揮班の中西一男曹長と二人で、夕刻原隊
を出発しました。途中浜寺諏訪森の従兄飯田晋次
郎氏に電話をして、大阪駅での面会に鯉節と赤禰
を頼みました。鯉節は輸送船が撃沈されて漂流し
た時の食物、赤禰は長く流して鱻に襲われるのを
防ぐためでした。大阪駅に着いた時にはすっかり
夜も更けて二十三時ごろでしたが、従兄は打ち合
わせた場所で既に待っていてくれました。駅の構
内は黒幕で灯が外に洩れないように厳重な灯火管
制が実施されており、鯉節と赤禰を頂き、持参し
てくれた青竹にいれた冷酒で武運長久を祈って乾
杯をし零時ごろ、列車に乗り込みました。広島に
向う軍用列車も鎧戸を下し、灯火管制をしていま
した。冷酒を飲んでいたので直ぐに眠れました。

六月十九日広島駅に着き、広島市内の石崎旅館

に中隊本部を置き、ほかに三つの旅館に兵たちの分宿の割り当てをしました。本隊は十八日に加太を軍用列車で夜間出発して、吹田操車場で待機して二十日に広島に到着しました。そして六月二十五日まで第三小隊長の高橋少尉（滋賀県神崎郡豊郷村出身）は当地で呉服店を営んでいたので地理に詳しく、その引率により比治山等に演習に行き乗船命令を待ちました。

旅館の食事は良く、飯は井鉢に盛り切りでしたが、朝食は味噌汁、海苔、漬物、昼は魚の煮付け、汁、野菜の煮物等、夜は刺身、魚の煮付け等でそのころ地方では不自由だった酒がここでは自費で飲めました。待機中のことでしたが、M中尉は京都の妻子に会いに行き、乗船命令がいつ来るか分からないので、その間中隊長ははらはらしていました。

またM中尉は街に出て下駄を買い、なにげなく旅館の床の間に置いたところを主人に見付けられ、主人は「私の家はいつも連隊本部の宿舎にな

り、この床の間には尊い軍旗が置かれる。それなのに下駄を置くとは何たる事ぞ」と大いに叱られ、M中尉は平身低頭をしたことがありました。ここでは指揮班の小寺曹長は胸部疾患のために入院の手続きが取られました。そして小寺曹長担当の庶務係は人事功績の中西一男曹長が兼務することになりました。

六月二十六日に乗船命令が下り、二十七日に乗船が決定しました。本土とも今日が最後かと、家郷のことを思い、その夜はなかなか眠れなかったものです。

六月二十七日、宇品港で乗船となり、午後宿舎の前に集合、整列をなし勇躍軍隊集合場所に着き小休止の後に軍装検査が実施されました。輸送指揮官の決意と注意事項が述べられました。その集合場には地図、磁石、煙草などを売る店があり、婦人会の人々による湯茶の接待もありました。中隊の家族らしい若い妻と思える人等が乳飲み子を背負って青いパラソルをさして四、五人見送りに

来ていました。比島行を知り会いに来たのでしようが集合場では面会をすることは許されませんでした。

部隊は順次波止場に向って出発しました。宇品港は水深が浅いためポンポン船で沖に停泊している輸送船に運ばれました。乗船したのは指揮船の「摩耶山丸」（三井造船玉野造船所で進水した一万トン以上の新造船）で、電波探知機を備えていました。船団は各輸送船が沈んだ時のことを想定して、一兵科はまとまって一つの船に乗らず、各兵科は分散して乗船しました。田原隊は指揮班が「摩耶山丸」に乗り、その他は三船に分乗しました。「摩耶山丸」にも各部隊が乗り込み、船内は雑踏しました。

船室は船倉で二段になっていて蚕棚と呼ばれるもので上下とも二十畳ぐらいの場所に三十人も詰め込まれました。小銃、鉄兜、帯剣、救命胴衣、雑囊、飯盒、水筒等完全装備でぎっしりであった。しかも船倉は人の息で蒸し返り僅かに通風筒や採

光窓より空気が入りましたが夜になると灯が洩れないように閉められました。ザブザブと窓を叩く波の音が聞こえ、汗がたらたらと出ます。場所が狭くて足を伸ばすことが出来ず、互い違いになり膝を抱えて寝るといふ窮屈な状況でした。

甲板には青竹と四斗樽にロープが結び付けてあるものが多く積み込まれていました。船が沈没した時の筏の代用をするためでした。七月一日、門司港を出港しました。ここで船団を組み、護衛の艦艇に囲まれ、敵潜水艦の攻撃に備えてのジグザグ航行で進路をルソン島のマニラを目指して西南方に進みました。

輸送船には船舶砲隊が高射砲を甲板に配備して敵の飛行機の空襲に備え、船尾には敵潜水艦用爆雷が多数積み込まれ、また船の各所には対潜水艦対飛行機の監視哨が昼夜を分かたず立哨していました。

船団は台湾沖を航行中に一隻の故障船が出ましたので近くの基隆港に寄り修理をして航行を続け

ました。バシー海峡にさしかかり、船団はジグザグの航行を続けました。海峡は荒れていましたが月は美しく輝いていました。夜中、ウトウトしていると拡声器より「総員乗艇せよ」の声とけたたましい喇叭の音が聞こえ、全員甲板に集合しました。

救命胴衣は絶えず身体に着けているので、小銃、雑囊、携帯食糧、水筒等を持ち、船倉より階段を急いで上がり甲板に出ました。海面を見ると大きな波のうねりがあります。訓練より本番の時は、甲板より縄梯子を降ろして救命ボートに乗り移るのですが、そんな余裕があるのかと不安になりました。そして連日連夜の呼集のため、兵達は睡眠不足と疲労で、心身とも疲労の極限で健康を損ねていました。あと二日でマニラに上陸出来ると聞きました。

この日の朝七時三十分ごろ甲板に上がって海を眺めていると、突如二番船「日蘭丸」の船尾より火を発し、大音響と共に甲板に積載していた戦車、

自動車、砲、その他の武器や物資等がアツという間に海中に崩れ落ち、船首を真つ直ぐに立てて船尾よりそのまま、バシーの海底に将兵と共に没してしまいました。この間僅か数十秒でした。数千の将兵、弾薬、兵器、食糧、資材などは、内地の映画館で見た映画の「撃沈」と同じで、戦争の残酷悲惨な光景を初めて目前に見て慄然としました。敵潜水艦の魚雷攻撃によるものか、あるいは船倉に積んだドラム缶の自然爆発か真相は不明でした。しかし船団の航行は停止することは出来ず、停止すれば、さらに敵潜水艦の魚雷攻撃の目標になるからです。かくして船団は一番近くのルソン島北端のアパリ港に入りました。アパリには友軍の飛行機場があり、護衛艦は直ちに海没者の救助に向いましたが、半時間ほどして引き返してきました。

再び船団を組みアパリ港を出て、七月十五日朝早くマニラ港に入港、朝日が輝き、無事に比島に着きました。敵潜水艦の雷撃や狭い船倉、睡眠不

足等、幾日か続いた心身の疲労より開放されたことを喜びました。マニラ湾には戦艦、巡洋艦、駆逐艦等が停泊し、空には飛行機が飛び壮観でした。マニラ港は水深が深く、第一より第七までの埠頭があります。船が全部入港して満杯でしたので午前は下船出来ず、午後の上陸となりました。埠頭には米、ゴム、ドラム缶、兵器、資材等が高く積みまわっていて、日本兵とフィリピン人が揚陸、積み込み作業に従事していたのを見ました。

七月十六日、中隊の主力は別命があるまでマニラ埠頭で揚陸、積載作業に従事することになりました。宮田、高橋両少尉、浪方軍医見習士官、中西曹長と自分の五人は、第十四軍司令部に連絡のために市内電車に乗りメトロポリタン前で下車、定期運行の自動車に乗り換えて、海岸通りに出ますと、海には爆撃で沈められた日本の船と数千のドラム缶が浮いているのが見られました。

海岸通りから眺めるマニラ湾の夕日は世界中で一番美しいと言われていますが、昭和十七年の第

一次比島遠征の時にここで眺めた思い出がよみがえり、往時と戦局の厳しさに格段の違いを感じました。日本大使館の前を通りポロ俱樂部を過ぎて左に折れるとマニラ街道です。さらにニコラス飛行場の横を通り第十四軍司令部に到着しました。ここは旧フィリピンのマツキンレー兵舎で、日本軍が占領後に陸軍病院、さらに軍司令部と変わったのでした。

昭和十七年七月ごろ入院した当時の病舎は軍経理部となっていました。用務が終わり街に出て中華料理店で昼食を取りました。そして十三時三十分の定期便に乗り、エスコルタで下車して街を歩きました。街は賑わっていましたが、僅か二年前に買った靴がインフレで三十倍の値段になっており高騰に驚きました。比島人の喫茶店でコーヒーとケーキを、次の店でアイスクリームとケーキを食べました。

五人の一行はさらに邦人経営の喫茶店「ふじ」に入り、フランス饅頭、酒、氷を食べました。店

主の熊谷氏は広島県の出身で、銀行員をしていたが店を邦人より譲り受けたとのことでした。街のあちこちを回っていると十七時を過ぎましたので、一同が夕食に中華料理を食べたいと話しますと、熊谷氏は支那街の店まで案内人を付けてくれました。この店では十品の料理が出て最後の焼飯は満腹で食べ切れませんでした。道端には編笠や南京豆を売るフィリピン人の露天商が見受けられました。そして夕刻に競馬場の宿営地に帰りました。宿営地での魚の煮付けの夕食は、満腹で手をつけられませんでした。

七月中ごろまで乗船命令の出るまではいろいろなことがありましたが、二十日ごろ、マニラ埠頭で偶然に会社の先輩の川隅治平氏に五年ぶりに会い懐かしさでいっぱいでした。召集で垣部隊に（第四十六師団）に入隊して乗船を待っているのとこのとで、お互いに名残惜しいが時間が無いので少し話をしただけで別れました。

七月二十七日、乗船命令により、サンタークロ

ス競馬場の宿営地を出発、雨の降る中を徒歩で、マニラ埠頭に向いました。その途中で輜重第十六連隊（恒六五六一部隊）自動車中隊のフォード社の自動貨車の行進を見掛けましたが、車の後板を白く塗り「丁」の字を黒く書かれていました。これは師団輜重で、私が昭和十六年十二月二十四日にラモン湾に敵前上陸をしてから十七年まで、自分もその一員でした。当時の初年兵の顔も見られましたが言葉を交わすことも出来ず、その自動車はあつと言う間に走り過ぎました。彼等はマニラ港より乗船していずれの島に行くのかと感慨無量の思いでしたが、後日垣部隊はレイテ島で全滅したことを知りました。

埠頭の広場には船が沈没して救助され、次の命令を待つ部隊やまた転進のための部隊が天幕を張り待機していました。我が中隊は「フランス丸」に乗船しました。この船は明治末期の造船の古い船で船脚も遅いと言われていました。出港して数時間すると雨のコレヒドール島が左に見えて来ま

した。

昭和十七年五月五日、コレヒドール要塞島に敵前上陸し、数多くの戦死、戦傷者をだすという激戦の後に占領した要塞でした。船は鏡のごとき海を航海しました。途中、七月二十八日、背中がただれて治療を受ける者が多くなり、二十九日には病死する者があり、初めて水葬を見ました。

七月三十日、「フランス丸」の蒸気機関の圧力が揚がらないので経験者は手伝ってくれとの申出が中隊にあり、修理班より一人行きました。船はミランダナオ島に行くらしいということを知りました。船の甲板に積んである生野菜を盗んで食い、また貯水タンクより僅かに漏れる水滴を飯盒に集めているのを炊事兵に見つかりビンタを食らう兵もありました。

七月三十一日、水が不足していたので食後の飯盒を洗うために紐を飯盒に結び、甲板より垂れ提げて海水を汲んでいたのですが、紐が外れて海に落とす兵もいました。

八月一日にセブ島のセブ港に寄港、上陸して水浴をしました。マニラを出発以来の水浴なので気分は誠に爽快でした。港の背後には山が迫り、故郷の浜大津に似た風景でした。

船内の起居は、この船も蚕棚で、蒸し暑さのために兵はみな疲労していました。同日セブ港を出港しました。港には国旗日の丸を掲揚した工場を見ました。甲板では「さらばセブ島よ、また来るまでは、しばし別れの涙に滲む」の「ラバウル小唄」の替え歌が流行、毎日歌っていました。

船は南に進み、八月四日夕刻、ミランダナオ島北端のカガヤン港に無事に着き、直ちに上陸を開始しました。この夕日は茜空に素晴らしく美しいものでした。また久し振りに見る衛兵所の電灯が、なぜか心温かく懐かしく感じられました。

八月六日、椰子林の中に建設隊が建てたニッパハウスの兵舎に入りました。直ちに井戸掘りを行いました。水がなくては飲料水、炊事、洗面、洗濯、水浴等何も出来ません。地下を二メートルほ

ど掘り下げると地下水が湧き出て、それを板で囲いをしめます。椰子林の中には点々とニツパハウスがあり、既に他の部隊が入っていましたが大便所は共用でした。

命令により中隊は上陸の翌日の八月五日よりカガヤン地区警備勤務及びカガヤン西飛行場設定作業に従事しました。飛行場の滑走路を人力で造成することで現地の比島人も協力しましたが、直射日光のために背中に水泡が出来る者が出て、作業を終わって帰ると医務室で治療を受ける兵が多く、中には水泡が破れてただれる者も見受けられました。

食事は悪く副食は「タンコン」と称する芹の葉の汁が多く、食糧の欠乏を思いました。炊事班長の中村新六軍曹の名から「新六汁」と言われました。

九月九日、西飛行場設定作業のため、九時ごろ飛行場の端にある器材小屋より作業用具を運び出し、整列して点検を受けていました。日ごろは日

本軍の飛行機はあまり飛ばないので今日は上空に多くの飛行機が飛んでいるので見上げてみると、突然低空飛行での機上掃射を受けます。敵機はグラマンで、現地人は蜘蛛の子を散らすように逃げ去りました。約十人の我が班は慌ててトタン屋根の器材小屋に隠れ身を伏せました。小屋が狙われているのは間違いない、伏せて柄の無いスコップを頭や背中、尻に載せて身を守る。

ついに機銃弾がトタン屋根を貫き、隣にいた戦友に当たりました。自分は紙一重の危機を逃れ、「ヤラレタ、痛い、助けてくれ、助けてくれ」との悲痛な戦友の叫び声。戦友の襦袢を赤く染め、ベツトリとした血が流れ広がってゆく。穴の開いたトタン屋根からは青い空が見え、三、四機のグラマンが飛び交い赤い曳光弾を発射し、盛んにこの器材小屋を目標に打ち込む搭乗者の顔がはつきり見えました。

柄の無いスコップの取り合いをして自分の身辺に置く。頭や背中を負傷する者が増えて「天皇陛下

万歳」の最後の声も聞こえます。この攻撃がいつ終わるか時間ごとにも長く感じられました。

攻撃が少し静かになったと思われた時に「田原隊は背後の森に退避せよ」の声を聞き、小屋を飛び出し早駆けで森に入りました。中隊では点呼で人数を把握すると、藤村一等兵戦死のほかにも数人の負傷者が出ました。

空襲が終わると直ちにアパカ林の兵舎に帰ると、ゲリラが飛行場付近の山より砲で滑走路に弾丸を撃ち込んで来ます。また敵の飛行機がカガヤン地区の物資集積所にダイビング降下飛行して爆弾を投下するのが見られました。そして夜になると集積所が赤々と燃えるのが望まれました。我が中隊は隣接部隊と共に陣地構築をし、徹夜でゲリラの襲撃に備えました。

グラマン戦闘機は航空母艦の艦載機であることを知ったのですが、日本軍の飛行機は一機も迎撃しませんでした。戦況は悪化し、八月四日に上陸してから四十六日間の駐屯でしたが、この空襲で

初めて戦死者と負傷者が出ました。その上に食糧事情も悪く、皆は新しい任地への期待をしていました。

十月一日付で中隊本部より第三小隊第二分隊に編入となりましたが連日道路補修作業に自動車で行き、作業は早く終わりに、魚釣りや蜜柑採り等を行いました。十月十二日、阿倍隊（第四飛行師団第三飛行場設定司令部の司令官阿倍修一大佐）のダバオ移動に伴い田原隊もダバオに向けて自動車で出発しました。十月十五日マライバライを経てキバウエに着きここで一泊しました。

十二月八日には本部広場に集合して大詔奉戴式が行われ、詔勅の奉読、その後故郷に向かって捧げ銃を行いました。大東亜戦争も満三年を迎えましたが、これから先の戦況はどうなるのかと思いましたが、十二月中旬、真弓仙松上等兵のラッパの吹奏で、宿舎前の道路で点呼、体操、銃剣術、軍歌演習がありました。入浴はドラム缶の風呂二本だけで、人が多かったので順番が回らず、自分は

水浴で済ませました。

新聞はダバオ新聞と同盟ニュースがありました。レイテ島の戦鬪で郷土部隊の垣兵团(第十六師団)が全滅したことを知り、また在ミンダナオの豹兵团(第三十師団)の一部もレイテ島に上陸しましたが悲報を聞くことになりました。ここダバオも平穩の地ではなく、敵の上陸も近いとのことでした。

十二月三十日、年末で年越しの準備をしました。明けて昭和二十年一月一日零時、非常呼集に起床、武装してローヤン橋近くの赤嶺宅前に集合して状況開始、払曉戦となり、栃木橋付近で六時に終わり初日の出を見ました。そして東方を遙拝、「天皇陛下万歳」を三唱し、軍歌演習をして駐屯地に帰りました。

七月十二日この日は十九・五キロの地点を出発して二十・五キロの地点に着き、川には遠い不便な所に露営をしました。貨物廠の塩を小隊へ持ち帰る途中、道の両側には兵士の死体が点々とあり

ましたが、どの死体も裸足でした。聞く所によると死ぬのを待って軍靴を脱ぎ取る。ひどい者は息のあるのに脱がせて盗り、それを履くのです。軍靴の補充は全く無く、裸足で歩く者が増えて来たためでした。

七月十四日、二十・五キロ地点を朝八時ころに出発するため、生き残った中隊全員が集合している時に、炊事班長の中村軍曹が「中隊長殿が下痢をして弱っておられ、缶詰の魚を食べたいと言われているので、誰か缶詰を持っていたら出して欲しい」といったのですが、兵隊達は黙っており、誰一人として応ずる者はありませんでした。密林の奥深い所で、明日食べる物のあても無く、持っただけでも缶詰は命の綱であることと、中隊長が常日ごろに兵を大切にせず反感を持っている者が多かったためでしょう。平時では階級で押し切っても、この局面では従う兵が無いのはいた仕方がないと思いました。

七月二十五日、朝九時出発する時に朝食の茸に

中毒したらしく腹が猛烈に痛むと同時に涎が出て止まらない。横になっていましたが分隊長の「捨て置く」の言葉に起き上がり、皆の者に励まされて出発をしました。山深い密林で一人いるのは死ぬことである。茸の中毒は自分だけで他にはなかったことを知りました。

途中、獣医部の一行に会いました。その中にミランダナオ島で勇名を知られた堀江獣医中尉（平安中学から東京獣医学校卒業大津市の寺の出身）がいて「人間は一日最低三グラムの塩を採らないと内臓が機能せず死んでしまう。山中では塩は無いのでこれから我々と同行して山を越え海岸に出て塩を採らないか」と話しかけてきましたが、北村兵長は「御好意は有り難いですがご迷惑をお掛けしますので別に行動します」と返答しました。堀江獣医中尉は「この先の戦局はどうなるか分からないが生きて故国で再会しよう。塩は海岸に行けば海水がある」と言い立ち去りました。後で北村兵長は皆の者に将校にこき使われるだけで同行す

ることを止めてよかったと話しました。

八月二十三日、米軍飛行機より谷の向い側に投下した大きなビラがヒラヒラと散って行くのを見ました。この日合流していた師団長衛兵の二人が、いつの間にか姿を消して分隊は六人となりました。八月下旬ごろよりあれほど毎日飛来したロッキードP 38 双同双発戦闘機が姿を見せないようになりました。同時に砲撃の音も聞こえなくなりました。

山中放浪後の昭和二十年九月十七日、キタワシにて捕虜となり武装解除、九月十八日、ダバオ、ダリアン第四捕虜収容所に入り、十一月十一日捕虜収容所出発、日本に送還となり、十一月二十二日、神奈川県浦賀に上陸、伍長に進級、復員は二十五日でした。

浦賀を出発して昭和二十年十一月二十六日に帰郷しました。そして翌年一月に大阪繊維商社に就職し、昭和五十六年五月に定年退職しました。